

## 「2017年国立台湾大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学総合人間学部・3年 加藤智也

中国語圏への興味関心を実際の行動、体験という形にし始めたのは昨年の夏に京都、北京で北京大学の学生たちと交流をしたのが初めてだったが、今回の留学は自分にとって二度目の中国語圏へのアプローチにして初めての中国語を現地で学び使うという経験となった。ほぼ自学自習で何となく学んできただけの中国語だったので、能力不足を痛感するとともに、これからの学習に向けて大きな刺激になった。

授業においては、テキスト以外にも映画や小説、口頭発表、会話等々、多彩なアプローチで中国語を学んだ。言語を学びながらそれを通してその文化や社会の問題を学ぶことが出来、興味深かった。授業は基本的にすべて中国語で行われるため、中国語を実際に使うという、自学自習では特に疎かになりがちな部分を補強できたかと思う。初中級程度の文法知識を前提としたうえで語彙、文型、運用能力を鍛えるというものだったので、土台となる基礎がしっかりしていなければならないと感じた。また、英語学習でもよく言われることだが、リスニングとスピーキングの能力が決定的に低く、現地の人との意思疎通が困難だったのが残念だった。こういう悔やみもこれからの学習の励みとして生かしていきたい。

昨年度は台湾大学の学生がバディとしていろいろと世話をしてくれたと聞いたが、今年度はアシスタントの学生の数がそこまで多くなく、日常で台湾学生と触れ合う機会は思ったより少なかったが、授業やイベント以外の自由に使える時間は比較的多かったので、台北市内、近郊の散策は十分にすることが出来、数日の旅行ではつかみえないような台湾の雰囲気を知り、台湾に対する興味愛着を抱くに至った。恥ずかしながらこれまで台湾という国にたいして殆ど無知であったが、この留学を機に関連書を読み、また実際に現地を体験することで、台湾、そして日本と台湾とのつながりについて多くの知識と実感を得た。複雑な歴史を経て現在に至る台湾では、今なお日本の影響を多くとどめている。ある意味、中国文化と日本文化の境界のようなもので、異質な中にとっかかりとなりうる親しみやすさが溶け込んでいるような感覚を覚える。こうした状況は歴史的に多くの人々の人生を巻き込みつつ徐々に形成されてきたもので、決して軽く見ることのできない重みをもっていると思う。もし可能ならば、この歴史の遺産ともいえる状況から、日中文化の融和を生むことができればと思った。街中にできればあちこちで日本のもの(アニメ、映画、本、グッズ、静岡お茶コーラ等々)に出くわす。これらが自然と人々に親しまれ知られていく。こうした文化の流れが一方的なものに終わってしまわぬよう、相互の交流を形作っていきたくと改めて考えさせられた。

言語を異にする文化を理解し関係を築くにあたって、その国の言語を習得することはほとんど必須といってよい最低条件になる。いかに英語がグローバル社会で公用語として通用するといっても、英語を母語としない文化同士が英語を介して築ける関係性の程度は思う以上に浅いだろう。また国家間の政治上のうわべの友好関係や経済関係も、もちろんそれが関係性を築く際の大本の土台になるにはせよ、決して真の友好関係をさすものではない。個々の人々がお互いに関心を持ち、知り、理解しようと試みなければそこから何が生まれるわけでもないだろう。中国語という言語を通して中国文化圏の生活、文化を理解しこれに親しむこと。こうした目標が今回留学に参加した動機でもあり、三週間という短い語学研修を終えた今、その果てしない道のりのはじめのいく歩かを踏みだしえたと感じている。